【66】

氏　名（本籍）	**堀出知里（愛知県）**
学位の種類	博　士（体育科学）
学位記番号	博甲第 3613 号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	体育科学研究科
学位論文題目	**通年型冒険キャンププログラムが不登校児の心理・社会的変化に及ぼす影響**

主　査	筑波大学教授	Ph. D. (Physical Education)	飯田　稔
副　査	筑波大学助教授	博士（心理学）	坂入洋右
副　査	筑波大学助教授	博士（体育科学）	中込四郎
副　査	筑波大学教授	教育学博士	新井邦二郎

論文の内容の要旨

（目的）

冒険プログラムを中心とした長期キャンプを含む通年型シリーズキャンプを研究の場とし，キャンプ内外での不登校児の心理・社会的変化に注目した総合的な検討を通して，不登校児を対象としたキャンプの実践上の要件（仮説）を提示することであった。

（対象と方法）

16 名の不登校児を研究対象として，過去の実践研究より導いた 6 つの研究課題を複数の観点から検討し，心理・社会的変化を論究した。研究課題 1 ：不登校児キャンパーの特性では，3 つの観点を設定した。キャンプ参加に至るまでの経緯（観点 1.1.）では，保護者への面接の内容，個人調査票の内容，キャンパー本人から聞いた話の内容を整理し，キャンプ参加に至るまでの経緯を把握した。パーソナリティー構造（観点 1.2.）では，エゴグラムを用いてパーソナリティー構造を把握した。キャンプに対する期待と不安（観点 1.3.）では，研究対象児に対して実施したアンケートの回答を整理した。研究課題 2：不登校児キャンパーの行動では，2 つの観点を設定した。対人行動と自主的行動の変化（観点 2.1.）では，キャンプ行動チェックリスト（宮西，1989）を基礎として作成した短縮版キャンプ行動チェックリスト（15 項目）を用いた。1 年目（2001 年度）の 2 回のデイ・キャンプと夏季キャンプの終了時に，研究対象児を担当したカウンセラーに，チェックリストへの記入を依頼した。データはグラフ化し，そこから見出される不登校児キャンパーの対人行動と自主的行動の特徴とその変化を把握した。キャンプでの行動の特徴（観点 2.2.）では，1 年目（2001 年度）の夏季キャンプで，研究対象児を担当したカウンセラーの日誌に記録された内容をデータとして使用し，グラウンデッド・セオリー・アプローチを援用して，カテゴリーの生成と関連づけを試みた。研究課題 3：不登校児キャンパーの仲間関係では，2 つの観点を設定した。キャンプ集団のソシオメトリーの分析（観点 3.1.）では，2001 年度夏季キャンプに参加した研究対象児 8 名と，登校児 13 名の，計 21 名の小中学生を研究対象とし，キャンプ中 9 回，ソシオメトリックテストを実施した。また，ソシオメトリーの背景を考察するために，カウン

セラーがミーティングで報告した内容の記録を利用した。仲間関係の形成と対人的構えの変化（観点 3.2.）では，観点 3.1. で扱ったデータのうちキャンプ 9 日目より 3 人相互の選択関係による友だち関係ができた男子 3 名に焦点化した分析を行った。研究課題 4：不登校児キャンパーの自己観の変化では，4 つの観点を設定した。自己決定志向性の変化（観点 4.1.）では，新井・佐藤（2000）が作成した児童・生徒の自己決定意識尺度のうち，自己決定志向性に関する項目（8 項目）を用いて，不登校児キャンパーの自己決定志向性を測定した。自己充実的達成動機の変化（観点 4.2.）では，森・堀野（1997）が作成した子どもの達成動機尺度のうち，自己充実的達成動機（他者・社会の評価にはとらわれず，自分なりの達成基準への到達を目指す達成動機）に関する項目（10 項目）を用いて，不登校児キャンパーの自己充実的達成動機を測定した。自己受容感の変化（観点 4.3.）では，西田（2000）が作成した心理的 well-being 尺度のうち自己受容（自己に対する肯定的な感覚)に関する項目を参考にして筆者が作成した 3 項目の質問を用いて, 不登校児キャンパーの自己受容感を測定した。パーソナリティー構造の変化（観点 4.4.）では，赤坂・根津（1989）が作成した小児 AN エゴグラムを用いて, 不登校児キャンパーのエゴグラムを作成した。研究課題 5:不登校児キャンパーの社会参加の様子では，2 つの観点を設定した。キャンプへの参加状況（観点 5.1.）では，キャンプ参加状況が記載されたキャンプ運営上の記録から，キャンプへの継続参加状況を調べた。社会参加状況（観点 5.2.）では，保護者への面接を通して社会参加状況を把握した。研究課題 6：不登校児が続けてキャンプに参加することの意味では，2 つの観点を設定した。事例の提示（1 事例）（観点 6.1.）では，キャンパー 1 名（中 2 女子）を事例として選び，研究課題 1 から研究課題 5 の論究の観点に沿って詳細に記述した。キャンプでの出来事との関連についての検討（観点 6.2.）では, キャンパー 1 名（中 2 女子）の事例について, 通年型シリーズキャンプに伴って生起した心理・社会的変化とキャンプの出来事との関連を検討した。

（結果と考察）

研究課題 1 では，キャンプでの対人関係と冒険プログラムに期待と不安を抱きがちであるという不登校児キャンパーの特性を示した。本論文で扱ったキャンプでは，事前にキャンプカウンセラーが直接かかわりを持ち，不登校児キャンパーとの関係作りにつとめたことが対人的安心感をあたえ，キャンプ参加の意志決定や動機を支えたものと推察した。研究課題 2 では，デイ・キャンプを経て夏季キャンプを終えるまでに，不登校児キャンパーの多くがキャンプ環境に適応したことを示し，本論文で扱ったキャンプのプログラム構成（シリーズキャンプおよび長期キャンプ）の利点を指摘した。研究課題 3 では，キャンプの場で不登校児の周囲に仲間関係が成立したことを示し，同年代および年少の登校児を加えたキャンプ集団の構成が，仲間関係の成立を支えたものと推察した。研究課題 4 では，自己観に関する変数は，冬季キャンプで変化したが, 一方, パーソナリティー構造のパターン変化は少ないことを示した。キャンプで性格は変わらないが, シリーズキャンプによるキャンプ経験の反復を通して自己理解が深まり，自己観が変化したものと推察した。研究課題 5 では，キャンプに参加した不登校児には，それに併行して社会参加への動きが起こり得ることが示され, 不登校児を対象とした通年型のプログラムを構成していく上で節目の時機が意味をもつことを推察した。研究課題 6 では，全ての研究課題を総括するものとして，不登校児キャンパーの事例（1 事例）から，（1）仲間関係の形成，（2）冒険プログラムの達成，（3）自己表現を受容される経験を背景として，キャンプ経験を通して成長の実感を得るという体験過程を明らかにした。この事例では，キャンプという新たな生活の場での対人交流を継続的に体験したことが自我の成長に寄与したものと考えられ，不登校児が続けてキャンプに参加することの意味を示した。

（結論）

本論文が研究の場としたキャンプは，不登校児の抱える心理・社会的課題に対して相応の効果が認められ

た。さらに，論究の過程を総括し，不登校児を対象としたキャンプ実践上の要件として（1）個人の要件，(2)設定の要件，(3）関係の要件，の 3 要件を得た。(1）個人の要件：①本人が自分の意志で参加を決定している。②キャンプの場で仲間と一緒に過ごせる。③キャンプに何かしらの期待を抱いている。(2)設定の要件：設定の要件は，その設定に適したキャンパーを選別する。①自宅から離れた遠隔地・都市から離れた自然環境。②冒険プログラムを含む長期キャンプ。③年間を通してのシリーズキャンプ。(3）関係の要件：①関係の力で課題を達成可能にする。②関係を続けることで新たな挑戦を可能にする。

審 査 の 結 果 の 要 旨

不登校は，長年にわたって深刻な社会問題となっており，根本的な解決策が見出されていないのが実情である。本研究は，キャンプ体験が不登校児の心理・社会的変化に及ぼす影響を検討することによって，不登校という今日的課題の解決に資するものであり，時宜を得た研究である。

わが国の野外教育分野において，1980 年代以降不登校児に関する研究は多数報告されていて，欧米諸国に比較して特徴的な動向といえる。先行研究において，夏季・冬季キャンプを中心に 7 ヶ月にわたる通年型冒険キャンププログラムの影響を検証した研究は皆無で，研究の着眼点に独自性が認められた。

また，研究方法においても，Mixed Method を採用して定量･定性の両面からデータを収集･分析しており，斬新かつ妥当なものであった。本論文で提示された，不登校児を対象としたキャンプ実践のための 3 要件（個人の要件・設定の要件・関係の要件）は，野外教育に新たな知見を提供するもので，実践場面への応用が可能であり，高く評価できる。

よって，著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。